EurekaⅨ

六年制通信　№17　令和３年９月22日（水）号

課題図書にしたい

六年制に異動して９年目の秋。もう９年かまだ９年か。実は当初、六年制の共通財産としての暗唱文集を作りかけたことがありました。三年制で大学進学を考えるとき、whose も習わずに入ってくる生徒たちの学力を上げるには時間がどれだけあっても足りないという感覚がありました。３年間はあまりにも短いと。単語帳一つとっても、例えば「ユメタン０」から高校生活をスタートする生徒たちに、学校の勉強やクラブ活動以外の余裕などありません。せっかく三重高校に来たのだから卒業するときには、クラス単位でもコース単位でもいいから何か共通の詩集とか小説を読んだとか、あるいは論語や聖書からの引用などを暗記したとか、そういった思い出をもってほしい、卒業後も大切な宝物になるのにと、教科の勉強以外に何か記憶に残るものがあってもいいのにと、そう考えていても実際にはそんな暇があったら勉強しなさいと、残念ながらそうなるのでした。

六年制に来て中３で「ユメタン１」が終わっているのを見ると、あれ、この子たちには結構余裕があるのではないかと思いました。高校受験もないしね。三年制の諸君から見れば実に羨ましい環境です。よし、それならたっぷり本を読むか、いくつかの名文を暗記するか、島崎藤村や中原中也を覚えるか、そんなことができるのではないかと考えていました。それで「三重中高の 100 冊」を、私の独断と偏見で選んで君たちに配布したこともありました。しかし、材料を集めてみてもなかなか実行できずにいました。今もできていません。自分が読んで面白かった、あるいは生徒のためになると思った本の紹介はしても、強制的にこれを読め、六年制の生徒は必ずこれを読んでから卒業しなさい、とは言えなかった。本当は各学年に課題図書を指定し、全員が同じ本の感想文を書く。中１では何々、中２では何々というふうにね。そうしたかったのですが、これもなかなか自信がなくてできていません。

しかし、やはりこれだけは読んでほしいと思う本があるのですね。何年か前に一度この通信で紹介しているし「100 冊」にも入れています。今も読み返したばかりなのですが、須川邦彦さんの『無人島に生きる十六人』(新潮文庫)、やはりこれは君たち若者が是非とも読むべき本ですね。今、このコロナ禍の中さまざまな場面で不自由を感じ気持ちが塞ぎがちになりそうなだけに、これを課題図書として指定したい気になっています。難破し無人島に取り残された人々がどう生きたかの物語を。

これは実話です。津にあった出版社からもこの物語は出ていたらしい。文庫の解説で、椎名誠さんがそう書いています。

明治 31 年の話ですから古い古いお話ですが、龍睡丸に乗り込んだ 16 名の船乗りがハワイ沖で遭難します。同胞の船に助けられ、一年後に全員無事に日本に帰還するまでを、無人島生活を中心に生々しく、生き生きと書いた、冒険小説の傑作と言っていいでしょう。まず私が感動したのは、暴風雨に遭い船体が壊れはじめ近くの無人島に行くしかないと決断した時の龍睡丸中川船長の言葉です。それが、「これから島へ行って、愉快にくらそう。できるだけ勉強しよう。きっとあとで、おもしろい思い出になるだろう。…中略…　先の希望を見つめているように。日本の海員には、絶望ということは、ないのだ」です。命の危険を感じながら、この言葉は出ません。そしてこの言葉に耳を傾ける 15 名の船員たちも素晴らしい男たちです。こういう話を読むと現代に生きている自分を恥ずかしく思います。今は、自分のことしか考えない大人が多いですからね。現代の大人はどんどん幼稚になっています。そして、無人島生活を始めるにあたって船長は次の四つの約束事を決めます。それが、「島で手にはいるもので、くらして行く」、「できない相談をいわないこと」、「規律正しい生活をすること」、「愉快な生活を心がけること」です。救助が来るか来ないかわからない中、何年に及ぶかもわからない無人島生活を「愉快にくらそう」というのは大人の知恵ですね。これも恐らく今の人には言えますまい。それくらい立派な考えです。いよいよ船を捨てるとき、船長はまだ少年の船員に勉強道具を持てるだけ持てと指示します。そして無人島で自分が教師となって少年たちを教えてもいます。どんな状況下でも、自分のできることが必ずあるということをこの本は教えてくれると思いますよ。

今週のおすすめ

・佐藤雅彦　『毎月新聞』　（中公文庫）

これは面白いエッセイ集です。佐藤さんは今は東京藝大の先生でしょうかね。確かNHK 教育の「ピタゴラスイッチ」を手がけた人ですよね。日常のさまざまな事象を題材に、嫌みのない、ユーモアのある良い文章を 50 篇ほど書いています。読んでいて、非常に良識のある、頭のいい人だと思いました。

最初の「じゃないですか禁止令」が私の世代には面白い。そうだそうだと共感します。例の「私って〇〇じゃないですか」という若者言葉ね。嫌いやわ。

あと「かもしれないグッズ」もよかったな。電車の中で退屈になるかもしれない、そう思ってあれも持っていこうこれも持っていこうと、カバンがいっぱいになる。また、風呂には電話がかかってくるかもしれないと思い子機を用意するなど、日常の生活にもこういう傾向がみられる。ここから学生時代の思い出になって、三泊四日のスキー合宿の最終日の夜、手品のうまい後輩にみんなで何か見せてくれとせがんだのですね。で、この後輩は、いくつか手品を見せるのですが、こういうこともあるかもしれないと思ってネタを仕込んでおいたわけでしょう。しかし、まさか帽子から本物の鳩を出すとは…。この鳩、究極の「かもしれないグッズ」かも。

この本、たぶん見つけにくいと思いますから図書館に入れておきますね。

BGM は *ゆず の 飛べない鳥* でした…。